

# こども家庭庁 第2回EBPM研究会 メモ

---

2023年9月12日

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社  
小林 庸平

# EBPM推進部局と政策部局の関係構築:米国におけるインタビューから

---

## ■連邦政府

- EBPM部局はサービスプロバイダーであるべきである。政策部局の疑問・質問に答えることが仕事であり、彼らの仕事を改善する必要がある。そのために、たくさんの時間をかけて対話を重ねて信頼構築に努めてきた。(連邦政府 EBPM責任者)
- 分析・評価は、政策担当者にとって抽象的なものである。私が心がけたのは、「分析・評価は政策担当者に仕事をよくするための道具なのだ」と伝えることだった。(連邦政府 元首席評価官)
- 政策現場と連携したEBPMを進めるためには、評価設問がエビデンスのユーザードリブンで設定される必要がある。それができれば現場との関係性を構築でき、EBPMが役に立つと思ってもらえる。評価は、脅威もしくは単なるアカウントビリティのツールだとみなされがちだが、学習と改善にフォーカスすべきだ。(連邦政府 EBPM責任者)
- パフォーマンスやアウトカムの改善に評価を活用するのであれば、価値を見出してくれる。でなければ評価はただのハンマーになり、政策部局はそれを拒絶する。(連邦政府 EBPM責任者)

## ■地方政府

- 政策立案に寄与する分析・評価を積み重ねると、今度は政策担当部局から積極的に相談が寄せられるようになってきた。(米国自治体シンクタンク代表)
- 政策部局との会話は、「何が必要か?」、「何が欲しいか?」、「何が知りたいか?」から始まる。(米国自治体シンクタンク代表)

## ■その他

- トップレベルから、政府はエビデンスに関心を持ち、政策はエビデンスを持つべきだというメッセージが発せられた。それが行政機関の文化と職員を変えた。(連邦政府 EBPM責任者)